

E. I. Farmer, R. Taylor, Ann Walther 編

*MING HISTORY : An Introductory
Guide to Research* (明史研究指南)

山根 幸夫

本書は Ming Studies Research シリーズの第三として
刊行されたものである。第一は、Keith Hazelton 編、*A
Synchronic Chinese-Western Daily Calendar 1341-1661*
A. D. (1984)、第二は、R. T. Wang 編、*Ming Studies in
Japan 1961-1981 : A Classified Bibliography* (1985) であ
る。

本書は明史を研究する欧米の学徒のために執筆された工
具書である。研究のためには、どのような文献、図書があ
り、それをどのように利用すれば好いかを、入門者にもわ
かり易く、丁寧に解説されている。否、入門者だけでなく、
相当程度の研究をつんだ者にも役立つ部分が多々ある
と思われる。以下、本書の内容を順をおって紹介してみた
い。全体が A、B、C、D、E、F の六部分より構成され
ている。

批評と紹介 山根

最初の A 部は、一般的な研究のための案内であり、七章
に分れている。第一章では、漢字のローマ字表記の方法に
ついて説明し、ウェード・ジャイルズ方式とピンイン方式
があることを述べている。なお、本書ではピンイン式で表
記している。第二章では漢文文献をよむために利用すべき
各種辞典を紹介する。最初は漢英辞典で、Mathews' 漢英
大字典、H. A. Giles : *A Chinese-English Dictionary*, F.
S. Couvreur : *Dictionnaire Classique de la Langue
Chinoise*, 漢英辞典 (H. K.)、次に中国語辞典として国語
辞典、辞海、辞源、新華字典、康熙字典、中文大辞典 (張
其昀) を挙げ、更に日本の漢和字典として、大漢和辞典、
大字典 (上田万年) を挙げている。日英辞典としても、
A. N. Nelson : *Japanese-English Character Dictionary*,
研究社 *New Japanese-English Dictionary* を挙げている。
これらは唯だ書名を掲げるのみではなく、それぞれについ
て頗る要領を得た解説を施している。右に挙げた各書は、
勿論明代に限ったわけではなく、中国史を研究するために必
要な辞典である。

第三章では人物の調べ方について述べる。中国人の名称
には、姓、名、字、号等があることを解説した上、人物を
調べるための辞典を紹介する。Dictionary of Ming Biog-
raphy, Eminent Chinese of the Ching Period, 中国人名大

辞典、八十九種明人伝記綜合引得、明人伝記資料索引、明史人名索引、明清進士題名碑錄索引、清代伝記叢刊索引、清代碑伝文通檢、古今同姓名大辞典、元史人名索引、元朝人名録、歴代人物年里通譜、歴代名人生卒年表、歴代人物室名別号索引、中国歴代帝王譜系彙編、古今圖書集成中名人伝記索引が掲げられている。斯様に明代のみに限らず、その前後の元、清に関するもの、更に全時代をカバーするものと、実意周到である。而して辞典と人名索引を併せ示している。

第四章は地理、地図に関する部分である。先ず地名辞典として、中国古今地名大辞典、中国地名大辞典の両書を挙げる。続いて、歴史地図集として、譚其驥編、中国歴史地図集・第七冊(元・明)、張其昀、中国歴史地図の両書を挙げ、更に現代地図の中華人民共和国分省地図集を示す。読史方輿紀要、青山定雄編、読史方輿紀要索引中国歴代地名要覽、Administrative Divisions, 中華民国郵政輿図、張其昀、中華民国地図集、丁文江等、中国分省新図、松田・森、アジア歴史地図、楊守敬、歴代輿地沿革地圖等の諸地図を掲げている。その中には、歴史地図と現代地図の両者が混在している。アジア歴史地図では森鹿三の名前が欠落している。

第五章では、紀年の問題を扱っており、最初に西暦(陽

暦)と陰暦の別を解説し、更に十干十二支について詳細な説明を加えている。続いて年号についても述べている。次に、明代の年表として、最初に挙げた K. Hazelton, *An Synchronic Chinese-Western Daily Calendar 1341-1661* に説明を加えている。更に、鄭鶴声、近世中西史日対照表、董作賓、中国年曆総譜、薛仲三、兩千年中西史日対照表、陳垣、増補二十史朔閏表の諸書を掲げている。

第六章では、官職について、その翻訳とローマ字化について説明した後、欧米人にとって中国の官職を理解するのに役立つ、次のような各書を示している。Ch. O. Hucker, *A Dictionary of Official Titles in Imperial China*——, *Government Organization of the Ming Dynasty* (HJAS, 21, 1958), H. S. Brunnet & V. V. Hagestrom, *Present Day Political Organization of China* の各書も挙げている。最後に、歴代職官表および明史の諸王世表、功臣世表、外戚恩沢侯表、宰輔年表、七卿年表に対して説明を加えている。第七章は省略する。以上でA部は終っている。

次に、B部は基本的な史料について、詳細な解説を加えており、著者らが最も意を注いだ部分ではないかとも考えられる。第八章では史籍解題、書目などを掲げている。やはり最初には英文の書が三冊示されている。即ち、*Sau-yu Teng* (鄧嗣禹) & K. Biggestaff, *An Annotated*

Bibliography of Selected Chinese Reference Works, E. Wilkinson, The History of Imperial China: A Research Guide, W. Franke, An Introduction to the Sources of Ming History 及び Cambridge History of China. Vol. 7 The Ming Dynasty, Part 1 を挙げてゐる。次に「明史藝文志・補編・附編があり、六種の芸文志・経籍志・経籍考を収めている。続いて、四庫全書総目、四庫全書総目及未収書目提要、謝国楨、晚明史籍考、黄虞稷、千頃堂書目、内閣藏書目録、国立中央図書館善本書目（台北）等の書目を挙げてゐる。できれば日本の尊経閣文庫や内閣文庫の漢籍分類目録を収めてほしかったと思う。

第九章は、明史の内容、構成について説明を加えた上、明史の版本について述べてゐる。明史の版本として、最も便利なもの、(1)校点を加えた中華書局の活字本、(2)百衲本、(3)台湾の国防研究院本の三種としてゐる。次に明史に關する索引類として、黄雲眉、明史考証、和田清、明史食貨志訳注、李洵、明史食貨志校註、野口鉄郎、明史刑法志索引、および李裕民、明史人名索引を掲げている。続いて、明史稿および傅維麟、明書について解説を加えた後、明史紀事本末に及んでゐる。

第十章は、明実録ならびにそれと関連する史料を挙げる。最初に、黄彰健が校勘した中央研究院（台湾）の明実

録を紹介するが、これは私たちにしても最も便利な版本である。明実録を解説したものとして W. Franke, The Veritable Records of the Ming Dynasty (in W. G. Beasely & E. G. Pulleyblank, *Historians of China and Japan*) を挙げてゐる。更に、歴代実録の巻数、編纂年を表示しているが、最後に掲げた崇宗実録は何を指しているのか疑問である。崇禎実録は存在しない。続いて、中央研究院本の明実録に付録された皇明宝訓をも紹介している。次に、明実録から史料を抜萃した趙令揚・陳学霖他「明実録之東南亞史料を挙げてゐるが、それなら、武漢出版社から続刊中の明実録類纂をはじめ、郭厚安、明実録経済資料選編、吉林省社科院歴史所、明実録東北史資料輯、明実録瓦刺資料摘編、明実録寧夏資料輯録等も挙げた方が良かったのではあるまいか。

次には、国権について、かなり詳細な解説を加え、新校明通鑑をも挙げてゐる。

第十一章では、官制書について述べてゐる。此処では大明会典と明会要の両書しか掲げてゐない。大明会典については、万曆会典について説明するのみで、正徳会典については全く言及していない。これは片手落ちというべきではなからうか。又、大明会典と明会要が併列されてゐるが、両書は素々、その性格を異にするもので、大明会典は基本

史料として位置づけるべきであろう。その他、皇明制書等も此処に挙げて好かつたのではあるまいか。

第十二章では、明律その他について述べている。最初に、大明律について解説しているが、参考書として黄彰健、明代律例彙編を挙げている。次に、明律の版本としては、一九〇九年、沈家本の序を付して刊行したテキスト（台湾影印本、一九六九）が最も適切であるとし、注釈書として明律集解附例をも挙げてゐる。此処に、获生徂徠、明律国字解をも挙げておいてはしかなかった。続いて、明律の基本原則である、五服、五刑、十惡、八議などにも説明を施した上、明律の構成（名例律、吏律、戸律、礼律、兵律、刑律、工律）を解説している。次に、明律の欧文訳として次の五書を挙げている。(1) Staunton, G. Thomas trs, *Ta Tsing Leu Lee, Being the Fundamental Laws*, (2) Boulais, Gui, trs. *Manuel du Code Chinois*, (3) Philastre, P. L. F. trs. *Le Code Annemite, Nouvelle Traduction Complete, Comprenant*, (4) Nguyen Ngoc Huy & Ta Vantai, *The Le Code : Law in Traditional Vietnam*, (5) Jones, William C., *The Great Qing Code*. 最後に、野口鉄郎、明史刑法志索引を挙げている。

第十三章では方志について述べている。最初に方志について、簡略な解説を加えている。次に、各種の方志目録を

挙げてゐる。即ち北京天文台編、中国地方志聯合目録（一九八五）、朱士嘉、中国地方志綜録、同、米国会図書館蔵中国地方志目録、国立国会図書館参考書誌部、中国地方志総合目録、山根幸夫、日本現存明代地方志目録、山根他、日本現存明代地方志伝記索引稿を挙げている。なお、拙編、日本現存明代地方志目録は、一九七一年に増補版を刊行、更に本年、新編日本現存明代地方志目録を発行した。

次に、方志に関する解説書を掲げている。Ch'u Tung-tsu, *Local Gazetteers. An Introductory Syllabus*, 張国淦、中国古方志考、中国方志大辞典（一九八八）等。次に、光緒蘇州府志を例として、方志の構成と内容を解説している。即ち、同書は星野、疆域、風俗、城池、坊巷、水利、田賦、物産、公署、学校、軍制、郷都、津梁、古蹟、壇廟、寺觀、第宅園林、冢墓、職官、選舉、名宦、人物、芸術、流寓、列女、釈道、芸文、金石、祥異、雜記、旧序の各項より成る。

第十四章では叢書を扱っているが、最初に叢書についての簡単な解説を加えた後、叢書目録を紹介する。即ち、中国叢書綜録三卷、玉宝先、台湾各図書館現存叢書子目索引、中国叢書目録及子目索引彙編の三書を挙げる。次に、代表的な叢書を紹介している。

(1) 四部備要（四部とは経・史・子・集を収めるからである）。四部備要書目提要も挙げている。

(2) 四部叢刊、続編、三編。

(3) 叢書集成および叢書集成簡編。

(4) 百部叢書集成および百部叢書集成分類目録。

(5) 四庫珍本初集、二集、三集。本書はここまでしか挙げているが、この後、更に十二集（一九八一）まで、および別輯（一九七五）が出版されている。

更に W. Franke, *An Introduction to the Sources of Ming History* に基づいて、紀録彙編、借月山房彙鈔、玄覽堂叢書を挙げている。玄覽堂叢書三編には、多数の貴重な明代史籍が含まれているわけであるから、別に項目をたてて解説を加えてほしかった。

第十五章では文集をとりあげている。最初に、文集について簡単な解説をした上、必要な文集を捜す場合には、どうすれば好いかを述べている。以下、所要の文集を捜すための目録を列挙する。最初に明史芸文志・補編・附編を挙げてある。山根・小川、日本現存明人文集目録（一九六六）増訂本、一九七八）、国立中央図書館善本書目（一九六七）。次に、文集と並んで「筆記」の重要性をも指摘している。而して、随筆について調べるための書として、謝国楨、明清筆記談叢、佐伯富、中国随筆索引、同、中国随筆

雑著索引を挙げる。更に、随筆を集成したのものとして、筆記小説大観、筆記叢編を掲げる。最後に、女性の著作を調べるために、胡文楷、歴代婦女著作考をも示している。

第十六章では経世文について略述した上、東洋文庫明代史研究委員会で編した明代経世文分類目録（一九八六）を挙げている。これは私たちの苦心の成果でもある。次に、W. Franke の前掲書をも参考すべきことを述べている。最後に、明代経世文の代表的なものとして、陳子龍編、皇明経世文編を挙げている。

第十七章では、類書について述べている。英語では、類書をエンサイクロペディアと訳する。最初に類書を説明しており、類書について知るには、次の諸書を参照せよと云う。

(1) S. Y. Teng & K. Biggerstaff, *An Annotated Bibliography of Selected Chinese Reference Works.*

(2) E. Wilkinson, *The History of Imperial China: A Research Guide.*

(3) J. H. Cole & E. Wilkinson, *An Annotated Bibliography of Reference Works on Imperial China.*

(4) W. Franke, 前掲書。

次に、実際の類書の代表として十通およびその内容、十通索引を挙げている。続いて、楊家駱、十通分類彙纂（中

国學術類編)を挙げ、その内容分類を示している。以下、代表的な類書として、太平御覽、永樂大典、古今圖書集成および佩文韻府を掲げて、その内容の簡単な説明を施している。

C部は現在の研究に関する事項を扱っている。第十八章では明史に関する雑誌をとりあげている。(1) *Ming Studies* (半年刊)は、書評、学界情報を多く載せている。(2) *Late Imperial China* は主として清史を扱う。(3) 明代史研究、(4) 明史研究専刊(台湾、呉智和編)、(5) 明史研究論叢、五巻で終刊、明史研究に継承されている。(6) 中国明史学会通訊(台湾)、台湾では今年一月、中国明史研究学会が成立したので、いずれ専門の學術誌が刊行されることであろう。なお、韓国では、明清史研究会会報が出版されている。

第十九章では欧文の書目、摘録版を扱っている。The *Bibliography of Asian Studies*、本書は欧文による最も代表的な論文、著書の目録である。次に、書評誌として *Revue Bibliographique de Sinologie* を挙げている。摘録版として *Historical Abstracts*、Part A を掲げる。必要な論文を検出するための索引として、The *Humanities Index* 及び The *Arts and Humanities Citation Index* の両書を挙げておく。

第二十章では、日本文による文献目録を紹介する。最初に東方学会の *Books and Articles on Oriental Subjects* を挙げているが、本書は欧米人にとって便利な目録であろう。次に、山根、明代史研究文献目録および新編明代史研究文献目録、R. T. Wang, *Ming Studies in Japan 1961-1981*、史学雑誌毎年五月号の回顧と展望、京大の東洋学文献類目(京大を東大と間違えている)等を挙げている。中国の復刊資料と同類の中国関係説資料(北辰)を掲げるが、これは復刊資料よりも早くから出版されている。最後に索引として、国立国会図書館の雑誌記事索引を挙げている。この索引は外国人によく利用されるらしい。

第二一章は、中国文の文献目録を紹介している。(1) 中国近八十年明史論著目録、(2) 八十年來史学書目、(3) アジア經濟研究所編、現代中国關係中国語文献綜合目録、(4) 余秉權、中国史学論文引得、(5) 中国史学論文索引二卷、(6) 中国近二十年文史哲論文分類索引(台湾)、(7) 中華民國期刊索引、(8) 報刊資料索引：歴史・地理の八種である。

第二二章では、学位論文の目録を紹介している。日本では学位論文の情報は全くないが、殊に米国では全面的に公開されている。それを調べるためには、L. H. D. Gordon & F. J. Shuman, *Doctoral Dissertations on China. A Bibliography of Studies in Western Languages 1945-1970*、F. J.

Shulman, *Doctoral Dissertations on China, 1971-1975*, *Doctoral Dissertations on Asia: An Annotated Bibliographical Journal of Current International Research* の四書 を挙げてゐる。その他、*Dissertation Abstracts* も紹介している。

第三章は、図書館および研究所の紹介である。当然、米国の研究者にとって最も利用しやすいものから挙げてゐる。

(1)米国議会図書館、(2)ハーバード・エンチン図書館、(3)プリンストン大学図書館、(4)シカゴ大学図書館、(5)ミシガン大学図書館、(6)カリフォルニア大学バークレー校舎図書館。米国では以上の六カ所を挙げてゐる。次に、台湾では国立中央図書館、漢学研究センター、中央研究院歴史語言研究所および傅斯年図書館、故宮博物院を挙げてゐる。

日本ではまず国立国会図書館を挙げ、同館の蔵書目録として帝国図書館和漢書分類目録を掲げているが、一九八七年に国立国会図書館漢籍目録が刊行されている（下巻の索引は未刊）。次には、内閣文庫（内閣文庫漢籍分類目録、一九七二）、東洋文庫、漢籍分類目録（経・史・子・集に分類）、京大人文科学研究所（京大人文研漢籍分類目録）を掲げている。東大東洋文化研究所が欠落しているのは片手落ちである。静嘉堂文庫や尊経閣文庫も当然収録すべきで

あろう。

中国に関しては、まず北京図書館（北京図書館古籍善本書目）を挙げ、続いて明清檔案部を挙げているが、これは現在中国第一歴史檔案館となっている。最後に、上海図書館（古籍総目録）について述べてゐる。但し、北京大学、復旦大学、あるいは南開大学の図書館等についても述べる必要があつたのではあるまいか。

最後に、米国ユタ州のモルモン教会の族譜図書館、およびミネソタ大学 Merleth Wilson 図書館のベル・コレクション（非漢籍文献）を紹介している。以上でC部の紹介は終つてゐる。

D部、E部は、明代の各種史料、即ち明通鑑、明会要、明史列伝（王守仁）、同（西域伝）、太祖実録、皇明泳化類編、大明律、皇明詔令、震沢県志の各一部分を引用、その漢文の一語一語の標音、語釈を述べたもので、欧米の学生で、明史を志す者にとっては、きわめて親切な叙述である。但し、この部分は私たちにとっては全く無用である。

F部は、短いものであるが、前述のケンブリッジ・ヒストリー（七）明史の他、グドリッチ・房兆楹、明名人伝、ハッカーの *A Dictionary of Official Titles in Imperial China* 等を挙げた後、四角号碼による辞書の引き方を詳細に説明している。更に、ウェード・ジャイルズ表記からピンイン

表記への転換表を載せている。その反対の表も示している。次に、明代の度量衡の英国式およびメートル式対照表をも載せている。

以上、本稿は本書に収録されている書名の羅列に終ってしまった観があるが、ある意味では本書の索引の役割を果すかも知れない。前述したように本書に収められている各書には、それぞれ適切な解題が加えられているから、私たちにとってても有意義なものである。それから、明史研究者にとつてだけでなく、前近代中国の研究者にとつても、頗る有益な工具書であることを指摘しておきたい。ただ、最新刊の文献が間々見落されていることが気になる。例えば、李小林・李晟文編、明史研究備覧（天津教育出版社）は、ぜひ挙げておいてほしかった。

最後に、本書は頒価三六〇、送料五〇で購入することができる。申込先は、Ming Studies, Center for Early Modern History, Univ. of Minnesota, 267 19th. Ave. S., Minneapolis, MN. 55455, U.S.A. である。

(Ming Studies, A四判四六七頁、一九九四年)

ジョナサン・バーキー著

中世カイロにおける知識の伝達

——イスラム教育の社会史——

秋葉 淳

イスラム世界における教育を扱った研究は決して少なくないが、教育活動をイスラム社会の具体的脈絡に位置付けて論じたものはほとんどなかったように思われる。本書はマムルーク朝時代のカイロに焦点を当て、年代記、伝記史料、教育論に加えてワクフ文書を史料に用いてその社会におけるイスラムの宗教的知識の伝達を包括的に描写し、宗教的知識がどのように社会に浸透していたのかを明らかにしている。本書全体を通じて著者が強調しているのは、イスラム教育が個人的な人間関係に基づくインフォーマルな性格をもち、そしてそこから「開放性」という特徴も導かれる、知識の伝達に社会の幅広い層が参加していたという点である。それがこの研究を一貫するテーマとなるのだが、まず彼の議論をその叙述にそって紹介していこう。

本書の構成は次のとおりである。